

---

# 恋心 (KOIGOKORO)

玉紀 直

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋心 (KOIGOKORO)

### 【Nコード】

N2885F

### 【作者名】

玉紀 直

### 【あらすじ】

僕は、恋をしている……。それは、決して実らない恋……。  
「憧れ」だけだった筈の高校の先輩に「恋」をしてしまった僕。キレイで優しくて何でもできる先輩。でも先輩には、すでに好きな人が居る。だからこの思いは、口に出しちゃいけない……。絶対……。切ないくらい、誰かを好きになる。誰の心の中にもある「恋心」のお話です……。

僕は、恋をしている……。

それは、決して、実らない、恋。

決して、口に出してはいけない、恋。

だって、あなたには、すでに心に決めた人がいる。

あなたの心の中には、すでに、違う人がすんでいる。

それでも、僕は……。

あなたが、好きです……。

「みつ光野先輩……」

1

「……で、コレが、追加分の原稿げんこうです。……あの……大丈夫ですか？」

僕がそう聞くと、彼女　先輩は「ん？」と、不思議そうな顔をして、大きな目を僕に向けた。

「何が？」  
小首こくびを傾かげると、先輩の栗色の髪がフワツと揺ゆれる。思わずその可愛らしさに見とれた。

「……あんな事が、あった後なんで……」  
先週、うちの高校の3年生の教室に、暴漢ぼうかんが入ると云う事件が起

こった。

2人組みの男が、そのクラスに居る大企業の1人息子を拉致する目的で、襲撃したらしい。

噂によれば、ライフル片手に。

今、僕の目の前で、月曜朝礼で発表する原稿を見ている先輩も、その教室に居た。

「ああ。例の事件の事？私は大丈夫よ。心配してくれて、ありがとう」

につこり笑う。・・・うわっ、可愛いなあ・・・。

それに、月曜朝礼で原稿を渡す時以外に会った事も無いような下級生の僕に、「ありがとう」なんて・・・。

なんて優しいんだろっ！！！！

これだもんな、1年生の頃から学園祭のイベントのミスコンで、2年連続優勝するよな！今年も間違いないって言われてるくらいだし！！！！

ウチの学校には毎年のミスコン優勝者が、月曜朝礼でその週の行事予定や各種注意事項を発表すると云う、「朝礼指導」というものがある。

この先輩は原稿をそのまま読むのではなく、まるで会話をしているかのように自然に話す。時折違う話しも組み入れながら。とても気さくで感じが良い。

それが、男子生徒のみならず、女子生徒にも人気がある秘密かもしれない。

美人なのに、それをハナにかけたようなところも無いしね・・・と、僕が先輩に見とれていると、先輩が僕の方をじーっと見ている事に気付いた。

「・・・高瀬春己君。・・・2年生？」

「え？はい・・・？」

あ、そうか。名札だ。先輩は生徒会役員が朝礼や行事で活動するときに下げる、スタツフバッチを見てたらしい。そこに、学年や名

前が書いてある。

「春己君っていつの？もしかして、春の生まれ？」

「あ、はい。4月です。「春己」なんて、女の子みたいな名前なんです、小学校くらいの時はよくからかわれました。変ですよね」

「そんなことないわ。ご両親がつけて下さった名前だもの。私の名前も「美春」だから「春」が付くのよ。春生まれだから。3月だから初春しゅしゅんだけどね。高瀬君と私の名前、上下ひっくり返したただけで似てるね」

うっわあああああああ。親に感謝！！名前に感謝！！！

今、この名前で良かった。って産まれて初めて思う！！！！

先輩はにこつと笑って、机の上で原稿をトントントと揃そろえた。

いつもそうだけど、一度読むと大体覚えてしまつらしく、原稿を揃えた後それをもう一度広げる事は無い。

頭も良いんだよな……。

本当。じゃんけんで負けて押し付けられた生徒会役員だけど、この月曜朝礼の原稿を先輩に渡す役目を貰もらっただけで、それだけで、大ラッキーだ！！！

……初めて先輩を見たのは、入学式のときだったっけ……。

祝辞しゅしの時に、生徒会長と一緒に壇上だんじょうに上がったんだ。

心臓が、一気に足元まで落ちていくような、衝撃しゅげきを受けた。

こんなキレイな人。初めて見た……。

その時から、ずっと僕の憧れあこがの人だ。

彼氏が居るとかっていう噂は聞かないけど……。本当かな。こんなにキレイなのに。

聞いてみようかな。ちょっと話しが出来たついでに……。

今、この朝礼が行われる講堂こうどうの小会議室にいるのは、僕と先輩だけだし。

「あの……。光野先輩……」

「何？」

彼氏……。いるんですか……？

「え・・・と・・・あの・・・。あの事件の時、先輩が犯人捕まえたって本当ですか？」

「ちがー！ーうー！そんな事ききたいんじゃないー！ーいー！！！！・・・まあ・・・聞きたい事ではあつたけど・・・。先輩は嫌な顔ひとつせずクスツと笑った。

「私が捕まえたんじゃないのよ。私は2人のうち1人に、携帯ぶつけてライフル蹴飛ばしただけ」

「蹴った・・・」

「こんなキレイな先輩が、蹴ったああ？！」

「捕まえたのは、犯人たちの目的だった当人よ。1人にライフル突き付けてね」

「突き付けた・・・。凄いですね・・・」

「あいつはそういう奴なの。ついでにその日は朝から機嫌が悪かったみたい。お坊ちゃんはお坊ちゃんなのよ。あんまり受け答えが生意気で犯人に一発殴られたくらいよ」

「・・・コワイ・・・」

「犯人の目的の人、つて・・・、アノ人だよな・・・」

「アノ先輩」この学校で、いや、この界限で知らない人の方が珍しい、つてくらいの有名人だ・・・。

「相当な「遊び人」なんだけど、男の僕から見ても凄くカッコよくて、もちろん女子からの人気はもの凄い。」

「確か、光野先輩とは、「幼馴染」だつて聞いた事がある。だから「あいつ」とかつて呼べるんだろつな・・・」

「幼馴染」かあ・・・。美男美女だよな・・・。付き合つてるとかじゃないよな・・・」

「高瀬君。10分前よ」

「ボーツと先輩を眺めながら考え事をしていた僕を、優しい声で注意する。」

「あーいけね！・・・じゃ、よろしくお願いします！！！」

「僕はそう叫んで、いつものスタンバイ場所である壇上のソデへと

走り出した。

そこで、ハッと気付く！

先輩が、名前呼んでくれた！！

2

「何だ。イイコトでもあったか？高瀬」

先輩に名前を読んでもらった事で、顔の筋肉が緩んでしまつて元に戻らない。

そんな僕を見て、生徒会顧問の宮川先生が冷やかすように肘で僕を突つづいた。

「はあん、さしずめ光野と話しが出来た・・・てトコロか？」

「せ・・・先生っ」

「照れるな照れるな。光野の所に原稿持つて行って、戻ってきたとたん上機嫌だ。誰でも分かる」

あわてる僕の背中をバンバン叩く。宮川先生は体育教師だ。体力がある分、痛い！

「光野は美人だからなあ。人当たりも良いし、優しい。あいつを嫌いだって云う男は見た事が無いぞ」

「・・・そ・・・そうですよね・・・」

頭を掻いて、話を逸らすために進行表に目を落とす。

先輩の朝礼指導は2番目。今日は校長が留守なので、最初に3分間、校訓や校則のスライドを流す。

「これより、月曜朝礼を行います」

進行役の声と共に、僕と並んで壇上のソデに居る宮川先生が片手を上げる。それを合図に講堂内の照明が落とされ、壇上の壁につるされたスクリーンに校訓校則が映し出された。

と、誰かが僕の横に立った。ふわっと優しい、イイ匂いが僕の中に入ってくる。

先輩が、僕の真横に立っていた。ああ、そうか。出番次だもんな。

でも、本当にイイ匂いだなあ……。コロンか何か付けてるのかな……。それともシャンプー……。？

なんだか僕は、胸がドキドキしてきた。

ちよつと体を動かせば、すぐ触れてしまうような位置に先輩が居る。

鼓動が、先輩に聞こえてしまうのではないかと思うくらい大きく、僕の中で響いている……。。

えーい！静かにしろー！！先輩に聞こえたら恥ずかしいだろー！！！！

自分で自分に怒っていると、約3分間の退屈なスライドが終わった。

これで照明が点いたら、いよいよ先輩の出番。……。なのだが……。どういふ訳か、照明がなかなか点かない。スライドの明りもいきなりパチンと落ちた。

「どうしたのかしら」

横で先輩が呟いた。講堂内がザワつき始める。

「……。ん。そうか。分かりました」

宮川先生が校内連絡用の携帯電話で、どこかと話している。多分、警備室だろう。

「ブレーカーの接触事故だそうだ。非常用電源も調子が悪くて、復旧まで5分くらいかかるらしい」

先生に直接説明してもらえた僕達はいいとして、問題は他の生徒達だった。何と云つても、先日学校に暴漢が入るといふ事件が起こったばかりだ。講堂内は1分もしないうちに、半分パニックになりかかっていた。

先生が手に持っていたハンドマイクを叩く。もちろん使い物にはならない。

「みんなー！落ち着けー！！ブレーカーの不具合だ！！すぐに復旧するからー！！」

自慢の大声で叫ぶものの、生徒達のざわめきの方が大きくて、そ

の声を聞いている者は居ない。

どうしたらいいんだろう。あと、どのくらいで戻るのかな……。あたふたしている僕の肩を、先輩がポンと叩いた。

「落ち着きなさい。生徒がパニックの時に、役員までパニックってどうするの？」

厳しい指摘。でも口調がとても優しい。

と、先輩は暗闇の中、いきなり壇上の横の階段から下へ下り始めた。

「……せんぱい……。？」

慌ててソデから出る。そして暗闇の中、僕が見たのは、壇上のすぐ下にある白いランドピアノのフタを開ける先輩の姿だった。

何をするんだろう……。

パアアア……！……！！……！！……！！

ピアノの高音（多分）の鍵盤を、一気に叩いたような大きな音。

騒いでいた生徒達が驚いて、一瞬悲鳴のような声上がる。だけど、いきなりのピアノの音に、さっきみたいな大きなざわつきが一瞬おさまった。

その時……

……とても綺麗なピアノの曲が流れ始めた。

先輩が……ピアノを弾いている……。

何ていう曲だったけ……。聞いた事のあるメロディー……。

凄く綺麗な……。優しい曲。

この暗闇の中、鍵盤がみえているのかはどうかは解らない。でも、先輩はピアノを弾き続けている。

そしていつの間にか、生徒達のざわつきはすっかりおさまり、誰もがピアノに耳を傾けていた。

皆の心を落ち着かせた、ピアノの主が分からないまま……。

僕だけが、その、救いの人、を知っている。

光野美春先輩……。

そろそろ曲が終わりそうな旋律が流れ始めた時、いきなり生徒席

から拍手が聞こえた。

え？誰？

と、同時に曲が終わり、復旧した照明が点く。

全生徒が一斉にピアノがある方向へ目を向けた。

ただ僕は、たった一人まだ拍手を続けている人物へ目を向ける。

・・・それは・・・

「葉山はやま・・・先輩・・・」

たった一人、曲が終わる瞬間から光野先輩に拍手を送っていたのは、先日の暴漢事件ぼうかんとしけんで犯人に狙われながらも、犯人逮捕に貢献した張本人だと言う、3年の葉山先輩だった。

全生徒の注目が集まったのを感じると、光野先輩はにこつと笑ってピアノのフタを閉め、素早く壇上上がりスピーチ台の前に立った。

「おそまつさまでした」

マイクに向かって、可愛い声で一言。

その瞬間、講堂中が歓声と拍手の嵐で包まれた。

3

「あつた。これだ」

思わず声に出して手に取る。

下校時に立ち寄ったCDショップ。

クラシックのコーナーで僕は「それ」を見つけた。

光野先輩が、今日パニックの生徒達を救った曲。

クラスの男子に聞いても皆「聞いた事はあるな・・・」と言って解らなかった。音楽部の女子せいがくに聞いて、やっと解った。

パッヘルベル「カノン」。

よくCMとか、ドラマとかでもBGMでかかっている。聞いた事はあるけど僕もタイトルは解らなかった。

色んな楽器のヴァージョンがある中で、ピアノ演奏のものを選ぶ。

家に帰ってすぐにそれを掛けた。  
ピアノの旋律が部屋中を満たす。

目を閉じると、暗闇の中で、まるで指が覚えているかのようにピアノを弾く光野先輩の姿が思い浮かぶ。

光野先輩……。

「私の名前も「春」がつくのよ」……本当に、春の陽だまりみたいなの、優しい人……。

次の月曜日が、待ち遠しい……。

先輩は、僕の事、覚えてってくれるだろうか……。

「憧れ」が「恋」に変わる……。

今の僕は、それを確信していた……。

「高嶺の花。って言葉、知ってつか？」

親友の高橋が、真面目な顔で僕に詰め寄る。

「……知ってるけど……」

翌日、3時限目の教室移動の時、2時限目の授業中に光野先輩の事を相談した僕に対して、親友の高橋が返した言葉は実に的を得ているが「そんなにハッキリ言わなくてもいいだろ！」と怒りたくなる様なものだった。

「光野先輩は、まさに！それさ。おれ達みたいな凡人にや手の届かない人なんだよ。解るだろ？あんだだけの美人だぜ」

「だからー、別に「つきあいたい」とか、そーいうんじゃないのっ。せめて告った方がいいかな……ってさ」

3階の視聴覚室へ続く階段を上りながら、こいつに相談したのは間違いだったか、とちよつと後悔。

「でもよお。光野先輩って、本当に彼氏いねーの？変な話し、ほら……例の先輩は？」

「葉山先輩？」

「でも、あの先輩って、女遊び激しくて有名だよな」

「光野先輩も、彼氏、って感じじゃなかったけど・・・」

昨日、あの後、光野先輩が控えている小会議室に、ひよこつと葉山先輩が顔を出した。

葉山先輩を真近で見たのは初めてだったけど、男の僕から見ても凄いかッコよかった。これだもんな・・・「女たらし」って言われでも無理は無い。

「あら、今日は拍手ありがとつ。よく私だって解ったわね」

光野先輩は、一番最初に拍手したのが葉山先輩だって解ってたみたいだ・・・。

「すぐ解ったさ。お前、最後の最後でちよつとトチったろ」

「あら？気付いた？」

肩をすくめて、ちよつと舌を出して見せた。

・・・ビツクリするくらい、可愛かった！

・・・高嶺の花、かあ・・・。

溜息が出る。深い深い溜息。

「そうだよな・・・。高嶺の花、だよな・・・」

あんなに可愛くて優しくて、すっかりしてて・・・。

僕の気持ちだけでも伝えようか、なんて、考えるのもおこがましい・・・かな？

落胆しかけて、視聴覚室のドアを開けようと手を掛ける。と、そ

れより先にドアが開いた。そして、

「あら？高瀬君」

開いたドアの真正面に光野先輩が居た。

あまりにも突然で、思わず体が固まる。挨拶しなきゃならないの

に言葉が出てこない。

「昨日はお疲れ様」

そう言っ僕をポント叩くと、そのまま視聴覚室を出て行く。今まで教室を使用していたらしい3年生が、その後からゾロゾロ出てきた。

僕は思わず道を空けるように廊下側に身をひるがえすと、光野先輩の後姿うしろすがたに向かつて思いつきり頭を下げた。

・・・名前・・・覚えてくれたんだ・・・。

先輩が横を通り過ぎた時の「いい匂い」が僕を包み込んで、頭がポーツとなってきた。

顔が熱い。きつと今、顔、真つ赤だぞ。

「高瀬君」声が頭からはなれない。何回も何回も頭の中でグルグル回ってる。

「ひゃー、間近で見たの初めてだー。すげーキレイー」

高橋がビツクリしてる。

そうだろ?!キレイだろ!!

「高嶺の花」そう自分に言い聞かせようとしていた僕の恋心こいしんは、どうにもこうにも治おさまらなくなっていた。

下げていた頭を上げる。もう先輩の姿は見えないけど、先輩が歩いて行った廊下をポーツと見詰めていた。

そんな僕を、最後に教室を出た葉山先輩が、チラツと横目で見て行った事など、僕には気付く余地よちも無かった。

4

「あれ?ハル。もう行くのか?」

待望たいぼうの月曜日つきほりがやってきた!!さあ、今日は朝礼の日だー!!先輩に会えるぞー!!

ヤル気満々、意気揚々(いきようよう)。家を出ようとしたところで、店と家を繋つないでいるドアから父さんが出てきた。

ウチは洋菓子店をやっている。小さいが、一応2号店まで広げた。両親共にパティシエなので、家の中はいつもお菓子の甘い匂いがする。

「今日、朝礼だからさ。いつもより早く行かないと」

「いつもの月曜より早くないか?」

父さんが廊下から居間の時計を覗き込む。

今から行くと、7時には学校に着いてしまっただろう。

朝礼は8時30分から。役員は大体7時30分過ぎ位に集まる。

「いいんだ。役員は7時になったら学校に入れるし」

一般生徒用に門が開くのは7時45分。生徒会や部活など、早朝に用事が有る者だけ7時に裏門から入れる。

「ふーん。熱心だな。お前、生徒会、面倒くさいって言ってなかったか？」

「うん。まあね。ちょっと、ヤル気出た……っていうか……」  
誤魔化す様に笑う。

いつもの月曜日は7時40分位に着くように行くのだが、その時間すでに先輩は小会議室で待機している。多分7時30分にならないうちに来ているんだろう。

だから今日は、早く行こうと思ったんだ。

「そうか、それは良い事だな。じゃあ、ちょっとコレ、食ってみて感想くれるか？」

父さんが長細い小さな箱を僕の前に差し出した。中を見ると、チョコレートが2個、並んで入っている。

「何？トリュフ？」  
「新製品の試作だ。リキュールで漬けたピールオレンジが刻んで入ってる」

匂いを嗅ぐ。確かにリキュールの匂いもするがオレンジ自体の匂いの方が強い。

「甘い、リキュールの風味も強めだ。……どうだ？」

1個口に入れた僕に、父さんが尋ねる。

「うん。ウマイよ。甘い中にガツンとリキュールの風味が効いてていいんじゃない？」

僕が褒めると、父さんは満足そうに頷いて店の方のドアへ入って行った。

おっと、いけない。早く行かなきゃ。

チヨコの箱を制服のブレザーのポケットに何気なく入れて、僕は学校へと走り出した。

もつすぐ、先輩に会える……。そう思うだけで、また胸がドキドキしてくるのが、自分でも解った。

5

珍しく。

本当に、珍しく。

今日、光野先輩が来たのは8時頃だった。

「おはようございます。ごめんなさい！本当に。遅れちゃって謝りながら小会議室に入ってくる。ちよつと息が切れている。走ってきたらしい。」

「珍しいな、光野。遅いから心配したぞ」

「すみません。宮川先生」

光野先輩が申し訳なさそうに笑った。

そんな顔も可愛くて、僕の視線はまたもやクギ付けだ。

宮川先生が準備のために出て行ってしまつて、小会議室の中は僕と先輩だけになった。

「ごめんなさいね。原稿スタンバイしてくれてるのに」

そう言つて椅子に座り、原稿を見始める。

「いいえ。平気です。今日は枚数も少ないし……」

僕は、先輩の横顔から、目が離せない……。

……ウェーブがかかったような、柔らかそうな栗色の髪……。大きな、きらきらした瞳……。

肌の色は、抜ける様に白……。

溜息が出るくらい……キレイだ……。

原稿に一通り目を通す先輩……。

そのどこか儂げな横顔を見ていたら……。切なくなつた……。

切なくて……。胸が痛い……………。

……これが、「恋」をするって事なんだろうか……………。  
ドキッ！！いきなり、胸の鼓動こぶつが大きな音をたてた。

先輩が、ジッと僕の顔を見ている。

綺麗な瞳まなこで。……白い肌に映はえる形の良いピンクの唇が、何か  
言いたげにちよつと開いている。

ドキドキドキ……………。

やばい……………聞こえるんじゃないだろうか……………。

でも、でも、何で先輩、僕を見てるんだろう……………。そんな、可愛  
い顔で。……どうしよう……………。どうしたんですか先輩！！！！  
と、先輩はゆっくり立ち上がって、スツと僕の胸の辺りに顔を近  
づけた。

わー！！！！どうしたんですかー！！！！せんぱいいー！！！！  
くんくんって……………え？何か、匂かい、嗅かいでる？え？僕。何か、  
匂かう？

先輩の髪が、ちよつと僕の顔に触れる。

うわ……………いい匂い。やっぱりシャンプーかなあ……………。

「やっぱり……………」

僕がボーツとしていると、先輩はそう呟つぶやいてパツと顔を離れた。

「高瀬君って、いつつも「いい匂い」がするね」

「え？」

先輩の方がいい匂いですよ！！

「甘い匂い。何か、美味しそう」

クスツと笑う。「美味しそう」と言われて、何故なぜか赤くなってし  
まった……………。

「あ、ウチ、洋菓子店なんです。家と繋がってるんで。いつつも家  
中が甘い匂いがしてて」

「それで甘い匂いがするんだあ。どこのお店？」

「駅前にある「メリイ・メリイ」って店なんですけど……………」

「本当？私、そのシュークリーム大好きなの！」

子供のような顔になる。うつわあ、かわいいつつ！！！！

「先輩。甘い物好きですか？」

「女の子ですからね。大好きよ」

お菓子の事なのに、「大好きよ」に体が反応する。

ドキドキが止まらん！不整脈ふせいみやくで倒れそうだ！！！！

「あの、じゃあ、これ」

ポケットから、今朝父さんに貰もらった試作チョコを出す。

「よかつたら食べてみて下さい。まだ試作品ですが・・・」

「いいの？」

「はい！是非せひ」

「ありがとうございます。いただきますっ」

箱に残っていた1個を一口で口に入れるものの、思ったより大きめだったらしく、口の中がいっぱいになってしまい、ちよつと恥はずかしそうに口元を手で隠かくした。

うわー、こんな表情見られるなんてー！！！！

父さん、感謝！！

「うん・・・おいひ・・・」

「おいしい」と言おうとしたらしい。でも口の中のチョコが邪魔じゃましてうまく喋しゃべれなかつたらしく、先輩はもう一回恥はずかしそうに今度は両手で口元を隠すと、くるつと後ろを向いた。

「うん。美味しいよ。オレンジの香りが凄く良い感じ。・・・あれ・・・？」

チョコを噛かんで口の中で小さくしてから喋しゃべっていたらしい。その先輩の口調が、最後でちよつと変わった。

あれ？後味悪かったかな・・・？

「・・・このチョコ・・・お酒入ってる？」

「え？はい。ピールオレンジをリキュールで漬けてるんで・・・でも、入ってるって程じゃ・・・」

「・・・そう・・・」

「先輩？」

何か様子がおかしいのに気付いて、僕に背を向けたままの先輩を覗き込む。

チョコは口の中で溶けてしまったらしい。可愛らしい口元に指先を当てて、ちよつと困ったような顔をしている。

「・・・あの・・・何か、まずかったですか・・・？」

僕がちよつと慌てかかっているのを見て、先輩は気を使うように笑顔を作った。

「な、何でもないので。ごめんね。チョコ、美味しかった。ありがとうね」

本当かな？何か慌てた様子・・・。

口に合わなかったんだろうか・・・。

美味しいって、いつてくれたし。僕も美味しいと思ったんだけどな・・・。

「ほら。10分前よ。スタンバイ。行こう」

「あ、はい」

先輩の後について歩き出す。

自分がしてしまった、とんでもない失敗に気付かずに・・・。

6

「何か、光野の様子おかしくないか？」

宮川先生が神妙な声で、壇上のソデで呟いた。

僕もそう思う・・・。

最初にスピーチ台に向かう時からそうだった。

いつもなら背筋を伸ばして堂々と歩いていく先輩の足取りが、何となく重くて遅かった。

「みなさん、おはようございます」その声も、どこか元氣無くて・・・。

今日の話しも、どこか切れが悪い、というか、何と言うか。表情

にも、笑顔が無い。

全体的に、いつもの先輩じゃない!!

どうしたんだろう……。具合でも悪いのかな……。

生徒達も気付いたみたいだ。ちよつとザワザワしてきた。

「……続きまして……。今週の行事予定ですが……」

そこまで言つて、先輩の言葉が止まった。

片手を目元に当てて、何か、辛つらそうな表情。

「ダメだ……。光野を下げさせる……」

宮川先生がそう言った瞬間……。

ガターーン!!!

スピーチ台のマイクにつかまっていた先輩が、その場に倒れた!!

「光野!!!」

「先輩!!!」

会場内の生徒が騒ぎ出す。

宮川先生と、僕や他の役員達が駆け寄ろうとした、その時!

……。誰よりも早く、壇上に身を翻ひるがえして上がり、先輩に駆け寄り、

抱き起こした者が居た。

「おい!大丈夫か!」

……。葉山……。先輩……。

「朝礼指導、終わりだ!!生徒会長!後はやつとけ!!」

葉山先輩が叫ぶ。光野先輩を抱き上げて壇上を降り始めた。宮川

先生が慌てて後を追う。

「おつ、おいつ。葉山!どこに……」

「保健室ですよ!!決まってるでしょうが!!」

……。こつ、こわい……。この人……。

光野先輩は?……。先輩は……。ポーツとした顔をして、肩で息を

してる。頬ほほが少し赤い。

「生徒会長。続きを」

宮川先生の指示で、生徒会長が壇上上がった。

「静かに!朝礼を続行ぞうりょうします!」

それでもざわつきは治おさまらない。

葉山先輩は、光野先輩を抱きかかえたまま、走るように講堂を出て行った。

誰よりも早く、壇上内にいた僕たちよりも早く、光野先輩に駆け寄った人。

3年生の席は、会場の上段。そこから立ち上がって駆けつけて来るって事は、葉山先輩は光野先輩が倒れる前、すでに言葉が出なくなりかけたあの時に、光野先輩を助けるべく壇上へ向かった事になる。

あの2人……。やっぱり……。なのかな……。

何か切なくなった……。

もしそうだったら、葉山先輩が相手じゃなんの勝負にもなりやしない……。

僕は肩で息をついた。

……。でも先輩。本当にどうしたんだろう……。

7

「このつ……。アホ!!美春!!」

保健室のドアを開けたとたん、そんな怒鳴り声が聞こえて僕は一瞬ビクツとした。

は……。葉山先輩の声……。だよな……。

「おい。どうした葉山。何をいじめてんだ?」

宮川先生が、休憩用のベットが並んでいる白いカーテンを開く。風通しのいい窓側のベットに、光野先輩は横になって、体にかかった毛布を顔の半分まで引き上げ、何か困ったような目で傍かたわらに立っている葉山先輩を見上げていた。

様子を見に行くといった先生に「僕も良いですか?」と言って、返事も聞かずに半分無理矢理くっついてきた……。だって、心配だったから……。

そうすると、いきなりこの怒鳴り声がきこえたんだ。

「大丈夫なのか。光野は」

先生が何故か、光野先輩ではなく、葉山先輩に聞く。

「心配い要りませんよ。酔っ払っただけです」

「は？」

「・・・よっばらった・・・？」

「朝礼前に、リキュールの入ったチョコを食ったらしくてね」

「チョコ？で？なんだ、酔っ払っただけ」

「こいつ、アルコール分のある物、ぜんっぜんつつ、ダメなんですよ！クリスマスのジューズみたいな0.3パーセントくらいのシヤパン飲んでもポーツとするんだからっ！お菓子類だっつてリキュール系の入ったチョコとか、ブランドケーキとか、食べられないんですよ！」

え？ええええー！！！！！

「リキュールが使われてるかなんて、食べる前に解るだろ！それを、何やってんだ！お前は！」

「あ・・・あのっ！葉山先輩っつ！！」

僕は思わず横から口を出した。

葉山先輩に怒られてて、光野先輩が可哀想で・・・。つい・・・。

「すっ、スイマセンでした！！」

思いつきり、頭を下げる。

だっつて・・・だっつて・・・ぼくのせいだよな・・・。これっつて・・・。

「お前。なんで謝あやまんの・・・？」

葉山先輩がジロツと僕を睨み見る。・・・こ・・・怖い！！！！

「あ・・・あの・・・僕・・・僕がチョコを先輩にあげたんです！あのっ、先輩がリキュール類ダメなんて知らなくて・・・。ほ、本当に・・・本当にスイマセン！！だから、だから光野先輩は、なんにも悪くないんです！！！！」

な・・・殴られるかなあ・・・。そうだよな。僕のせいで光野先

輩が倒れちゃったんだから。2人が付き合ってるんだとしたら、葉山先輩に殴られたって、文句は言えないよな。

「ありがとう……」

頭を下げたままの僕の耳に、とても優しい声が響いた。

「私が、こいつに怒られてるから庇かばってくれてるんでしょ？でもいいのよ。洋菓子屋さんのトリュフって、たいてい洋酒系が使われてるでしょ。なのに確認しなかった私が悪いわ。どうなっちゃうか自分が一番良く知ってるのにな」

頭を上げた僕の視界に入ってきたのは、ベットの上に上半身を起こして凄く優しく微笑む光野先輩の姿だった。

「そうでしょ？ね？」

光野先輩は、横に居る葉山先輩を悟さとすように問いかけた。

「……お前が、そういうなら、いいよ……」

なんとなくシブシブ。葉山先輩が納得した。

「彼ね。「メリィ・メリィ」の息子さんのよ」

「駅前の？」

「そう。学もあそこのシュークリーム好きでしょ？」

え？そんなんですか？

「久し振りに食べたいなー。今日買ってきてっ。ねっ？」

光野先輩が可愛い声を出して、葉山先輩の制服の裾すそをクイクイ引っ張った。

声も可愛いけど、やる事も可愛い！この人！！

葉山先輩は「しょうがないな」とでも言うように肩で息をつくと、ちよつと笑って光野先輩の頭にポンと手を置いた。

「わかったよ」

さっきまでの声とは全然違う。優しい声。

「でも、1時限目は休んでるよ。俺、付いてやるから」

と、いったとたん、カーテンの向こうで椅子がガタンと大きな音を立て、養護の先生が勢い良くカーテンを開けた。

「葉山君はダメよ！光野さん休ませたら、教室に戻りなさい！！」

「……はい……」

葉山先輩が「やべー」みたいな顔をして、ちよつと舌を出した。

……保健室で「悪さ」してた事があるって噂、思い出した……

葉山先輩は光野先輩に「じゃあ」って手を上げると、すれ違いざま僕の肩に手を置いた。

「お前。少し付いててやってくれな」

後ろを向いたまま片手を上げて保健室を出て行く葉山先輩は、さつきとは違う、落ち着いた声だった。

「殴りかかってくるかと思ったぞ」

宮川先生がホツとしたように言う。

……僕もです!!!!!!

8

「本当にすみません!!!!!!」

僕はもう一度、光野先輩に頭を下げた。

もう、1時限目が始まっている。宮川先生も授業に行った。今は先輩と2人だけだった。

「もういいって。ほら。もう大丈夫。フラフラしてないでしょ?」

ベットから下りて立ち上がり、小さくピョンとはねてみせた。

「でも本当にチョコは美味しかったわよ」

ちよつと肩をすくめて見せて、それからストンつとベットに腰を下ろすと、今度は先輩が申し訳なさそうな顔をした。

「こつちこそ。ごめんなさいね。さつき、怖かったでしょ?」

「……葉山先輩……ですか?」

「うん、怒り出すと簡単に止まらないところがあるから……」

「怖かったです……正直……でも、無理も無いと思います。

自分の「彼女」が倒れる原因を作った奴が目の前に居たんですから。ぼく……僕、殴られても文句は言えないと思ってます!」

言うつつもりなんて無かったのに、つい気にしていたことが口から出てしまった。

これじゃあ、光野先輩が葉山先輩と付き合ってるって決め付けてるようなもんじゃないか！

「……葉山先輩……怒るの、当たり前で……」

「……ちがうわよ……」

そんな僕の言葉を、光野先輩が遮る。

「……私……。学の「彼女」なんかじゃ、ないわ……」

そう言った、光野先輩の表情……。

寂しそうな……。

悲しそうな……。

何で、そんな、辛つらいそうな顔、するんですか……？

「あいつはね。幼馴染の独占欲どくせんよくで私にかまってくるだけなの……。

だから……ちがうのよ……」

まるで、自分に言い聞かせるように……。

光野先輩はちよつと泣きそうな顔で目を閉じた。

……ああ……そうか……。

そうなんだ……。

光野先輩は、葉山先輩が、好きなんだ……。

だから、あんな

寂しそうな

切なそうな

顔をするんだ……。

先輩の心の中には、すでに、違う人がすんでいる……。

考えるだけで、寂しくて、苦しくて、切なくなる。

そんな「伝わらない、恋」。

「すみません。また僕。余計な事・・・」  
「しみり謝る僕に、先輩はあくまで優しい。」  
「いいのよ」

先輩みたいな人が、そんな恋をするなんて・・・。

9

「これあげる」

次の週の朝礼の時、いつもの小会議室に行った僕は先輩に小さな箱を貰った。小さな5〜6センチ四方の箱。

「これは？」

フタを開けると、中に正方形のカード型のチョコが6枚入っていた。

「洋菓子屋さんに失礼だけど、私のお気に入りのチョコなの。食べて見て。この間のお返しよ」

一枚口に入れる。

凄く爽やかなミルク味。それでいて、後に残るコク。・・・美味しい！

「美味しいですねえ。すつごく優しい味だ。なんか、先輩みたい」  
言ってから、ハツとした！何言っただ僕！！

「ありがとう」

先輩は、そう言っつて、微笑んだ・・・。

僕は、その顔を見て、ハッキリと決めた。

告白しよう。

僕の気持ちを、先輩に伝えよう。

解ってる。先輩には、好きな人が居る。

でもいいんだ。僕の気持ちを知ってもらえるだけで。

告白しよう……。

そう決意した数日後に、その事件は起こった……。

その日は朝からよく晴れ渡り、とても爽やかな朝だった。

「よ。高瀬」

校門を入ったところで、高橋が僕の肩を叩いた。クラスメイト数人も一緒だ。

「よう。っはよっ」

軽く挨拶をした時、いきなり校門から大型バイクが大きなエンジン音を立てて校内へ入り込んできた。

な……なんだあ……？

あ、でも、この学校で、大型バイクで登校してくるのって……。そのバイクは、校内へ続く前庭でエンジンごと停まった。どうやら友達を見つけたらしい。

大型バイクで登校して来る人なんて、1人しか居ない……。

「葉山先輩だあ」

「かつこいー」

周りの女の子達が騒ぎ出すものの、葉山先輩の後ろに女子の制服を着た誰かが乗っているのを見て、ざわめきが止まった。

ヘルメットも被<sup>かぶ</sup>らないで乗っているの、すぐ解った。

光野先輩……。

光野先輩が、葉山先輩のバイクの後ろから降りる。

「光野先輩だ……」

思わず呟く。と、光野先輩がこっちをチラッと見たような気がした。

ドキツとした・・・。

何か、光野先輩の表情が、この間見たのと全然違う気がした。どこか、嬉しそうな・・・。

幸せそうな・・・。

凄く、綺麗な表情。

周りに居る登校途中の男子生徒達も、光野先輩を見て行く。

あたりまえだ。

僕が好きな人は、最高に可愛いから。

「今日もキレイだな。先輩」

クラスメイト達もそう言ってハシヤギ気味。

朝から会えるなんて、何てラッキーなんだろう。

と、その時だった。

バイクにまたがったままの葉山先輩が、いきなり光野先輩の肩を抱き寄せたのだ。自分に寄り添わせるように。抱きしめるように。

ぐっ・・・と。

そして、僕達の方を、その辺で光野先輩をみているであろう男子生徒達の方を、ぐるっと見回して声高らかに叫んだ。

「美春は俺の女だからな！誰もちよっかい出すなよ！」

前庭中が、男子やら女子やら、悲鳴やら歓声やら、でパニックになった。

・・・俺の・・・？・・・女・・・？

聞こえないけど、光野先輩が赤くなって葉山先輩に何か言ってる。

僕に怒った時とは違う、正反対の凄く優しい顔。

2人共、とても嬉しそうな・・・。

幸せそうな・・・。

ああ、そうか・・・。

光野先輩の思いは、伝わったんだ・・・。

そしてちゃんと、受け入れられたんだ……。

光野先輩は、とてもとても幸せそうで……それでいて……いつもより、輝いていて……キレイで……。

ズキン……。

胸が痛くなつた……。

でも何故だろう。

悲しくは無い。

だって、先輩は、あんなに幸せそうだ。

あんなに嬉しそうだ。

先輩の嬉しそうな笑顔は……

僕も嬉しい……

先輩が、幸せなら……

僕も、幸せ……

ブレザーのポケットを探る。

光野先輩に貰ったチョコの箱が、お守りのようにずっと入っていた。

僕の思いを伝えたら、食べようと思っていた。

僕は箱を開けると、残っていたら枚を一気に取って口に入れた。

一枚一枚が小さいので、それは簡単に口に入り、そして……。

……溶けていった……。

チョコの甘い味が口の中に広がる。

優しい……凄く優しい。元気になれる甘さ。

……光野先輩みたいな……。

僕はちよつと上を向いて、晴れ渡った空を、まぶしい、とでもい  
うように、片手を両目の上にあてた。

悲しくないはずなのに・・・涙が出てきた・・・。

僕は、恋をしている。

それは決して実らない恋。

決して口に出してはいけない恋。

だって、あなたには、心に決めた人が居る。

あなたの心の中には、違う人がすんでいる。

それでも僕は・・・

あなたが好きです・・・。

僕は、この恋心を、きつと一生、忘れない・・・。

END

(後書き)

こんにちは。玉紀 直です。

今回初めて、玉紀の作品を読んで下さった方、初めまして。読んだ事ある、という方も、最後まで読んでいただき有難うございました。

「青春小説系」は初体験です。ドキドキ・・・。

だいたい「恋愛小説」で、大部分「R-15」なので。(笑)

男の子を主人公にしてみました。こういう気持ちって、女の子はモチロンの事、男の子だってもってると思うんです。

今回の物語に出てくる「先輩」は、知っている方もいるかもしれませんが、玉紀が書いてる別のお話し「理想の恋愛 完璧な愛」に出てきている子達です。

また使い回してるよ、って言われそうですが・・・。

興味のある方は是非御一読くださいませ。(R-15 数箇所あり・・・ですが)

「恋心(KOIGOKORO)」

どうぞでしょう??

お気に召して頂けたでしょうか?

もし宜しければ、評価感想等、頂けると幸いです。

また次の作品で、是非、あなたとお会いできますように・・・。

有難うございました。

感謝をこめて・・・。

玉紀 直

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2885f/>

---

恋心 (KOIGOKORO)

2010年10月12日03時23分発行